

2020年大統領選挙をめぐるアメリカ・カトリックの分断

山 崎 由 紀

本稿は、アメリカ現代社会・政治の分析を、本学ディプロマプログラムである「グローバル市民プログラム」と「キリスト教教育プログラム」における教育に活用する試みの一つとして執筆したものである。

はじめに

2021年1月20日正午、アメリカ合衆国憲法修正20条¹⁾にしたがってアメリカに新政権が発足した。誕生したのはジョゼフ(ジョー)・ロビネット・バイデン・ジュニア(b.1942)第46代大統領率いる民主党政権である。バイデンが大統領選挙におけるランニング・メイト(副大統領候補)に選んだカマラ・ハリス(b.1964)に見られる通り、この新政権は、女性が要職に就くことを妨げてきた「ガラスの天井」を破り、ハリスの副大統領としてのホワイトハウス入りを実現し、ジェンダーにおいても、エスニシティにおいても、極めて多様な人材による組閣を果たしている。バイデン自身もアイルランド移民の子孫であり、カトリック信徒として非WASPの大統領となった。新政権は、アメリカがとりわけ世紀転換期の19世紀末以降築いてきた多様性という価値観の中で、一致が目指されるものとなる。

一方、コロナ禍の中で行われた2020年の選挙戦は極めて異例であり、異常なものとなった。11月3日の選挙人選出を目的とした選挙は、大接戦の上に、コロナ禍対応の郵便投票の開票待ちなどで、ラストベルト3州(ペンシルヴァニア・ウィスコンシン・ミシガン)の開票完了を数日待たねばならなかった。この3州の開票後、バイデン=ハリス両候補の獲得総選挙人数が過半数となる270人を超え、選挙結果が判明したのは11月7日のことであった。²⁾その後、当時現職であったドナルド・トランプ大統領(b.1946・任期:2017-2021)が敗北を認めず、明確な証拠を提示しないまま選挙に不正があったと訴え続けたために、政権移行プロセスに混乱が起こることとなる。³⁾一般的な大統領選挙においては儀礼的に行われる1月6日の両院議会合同での投票の集計・確認作業は、トランプ大統領の演説に突き動かされた支持者らが暴徒化して議事堂に乱入し、暴力的に議事運営を妨害しようとしたことにより、中断を余儀なくされた。国外からのテロではなく、国民による暴力で民主主義の根幹である議会が危機に晒されたこと、それが現職の大統領の呼びかけに応えたものだったということは、アメリカ社会に大きな衝撃を与えた。前政権の4年間をかけて広がり続けた分断の傷が目に見える大きな社会の裂け目となっていたこ

とが国民に認識される事件となった。

11月7日、大統領選挙の勝利演説においてカマラ・ハリスが述べた通り、バイデン新大統領に期待されているのは、民主主義国家アメリカを癒し、国民の分断を鎮め、再び一致を目指すことである。⁴⁾かつて非 WASP としてメインストリームから排除される立場にあったカトリック信徒のバイデンにその役割を果たすことはできるのか。バイデンが乗り越えるべき問題は、プロテスタント対カトリックという構図の中よりも、むしろカトリック内部の対立・分断にあることが選挙戦を通じて明らかとなる。本稿は、歴史的視座を基点として、バイデン政権が目指す多様性の受容と国民の一致およびその可能性について、とりわけ非 WASP 大統領、カトリック信徒の大統領を擁した新政権と教会や信徒、カトリックと非カトリックのアメリカ国民の関係の中で論考する。

1. バイデン内閣にみる多様性

バイデンが副大統領候補に選んだハリスは、民主党党大会における指名受諾演説でハリスを選んだバイデンを「大胆」と評した。⁵⁾ハリスの選択のみならず、選挙戦後バイデンが任命を目指してきた閣僚には、(両親の出自が WASP である) ストレートな WASP は皆無となっている。新政権組閣では、内閣自体が多様性の象徴となることに重点が置かれた様子が窺える。ハリスは女性初の副大統領であるばかりでなく、ジャマイカ出身の父によりアフリカ系初、インド出身の母により南アジア系初の副大統領でもある。初代大統領ワシントン以来、米国大統領は「ミスター・プレジデント」と呼び慣わされてきたが、就任宣誓以来、ハリスは「マダム・ヴァイス・プレジデント」と呼ばれている。バイデン内閣では、国務長官のアントニー・プリンケン (b.1962)、女性初の財務長官ジャネット・イエレン (b.1946)、司法長官のメリック・ガーランド (b.1952) をはじめ、ユダヤ系の人材も多い。国防長官ロイド・オースティン (b.1953)、住宅都市開発長官マルシア・ファッジ (b.1952) は黒人である。内務長官のデブラ・ハーランド (b.1960) は父がノルウェー系、母はアメリカ先住民のプエブロ族出身である。閣僚級高官まで含めれば、通商代表に台湾系のキャサリン・タイ (b.1974/75)、行政管理予算局長にインド系のニーラ・タンデン (b.1970) と、アジア系も含む。ヒスパニックで言えば、保健福祉長官のハビエラ・ベセラ (b.1958)、教育長官のミゲル・カルドナ (b.1975)、国土安全保障長官のアレハンドロ・マヨルカス (b.1959) が、それぞれメキシコ、プエルトリコ、キューバに西半球でのルーツを持つという移民史の教科書のような布陣である。運輸長官には、バイデンと民主党大統領候補を争ったピート・ブティージェッジ (b.1982) を配した。彼は LGBTQ であることを公言した初の大統領候補として注目されていた人物である。⁶⁾

エスニシティに話を戻せば、この政権は極めて非 WASP (White Anglo-Saxon

Protestant) 的な政権である。いずれの閣僚、閣僚級高官も、たとえ片方の親が WASP に属するとしても、もう一方の親が非 WASP であり、ストレートな WASP はいない。これは前政権であるドナルド・トランプの共和党政権とは極めて異質なものとなっている。前政権末期のメンバーを概観しても、黒人、イタリア系、アイルランド系、レバノン系、ユダヤ系閣僚が見られはするが、多様性が取り沙汰される様相ではない。バイデン内閣は、女性が史上最多の政権と報道されることが多い。しかし、このように人種・民族的にも極めて多様であり、米国史上特筆すべき閣僚構成となっている。

ジョー・バイデン自身は、ペンシルヴァニア州スクラントン出身のアイルランド系であり、先祖の一部はいわゆるジャガイモ飢饉 (1845-1849) の時代のアイルランドからの流出者である。シークレットサービスによるコードネームも、「セルティック (Celtic)」⁷⁾ すなわちケルト人とされ、バイデンの民族的出自は周知されている。スクラントンは 19 世紀後半以来、炭鉱業で発展した町であったため、19 世紀半ばの飢饉から始まる流出アイルランド人の多くがこの町に炭鉱労働者として暮らすようになった。

アイルランド系移民は、初期の非 WASP の大量移民グループとして、度重なるネイティブイズム (排外主義) による差別・排斥の対象となってきた。差別・排斥の対象となった最大の原因は、彼らがカトリック国出身のカトリック信徒であり、ピューリタンとして入植したカルヴァン派、また植民地時代以来のエスタブリッシュメントである監督派教会⁸⁾ といったプロテスタント諸教派とは異なる価値観を有する、と考えられたためである。その最大の論点は、一言で言えば、「アメリカ合衆国に対してではなく、ローマ教皇に忠誠を誓う」存在なのではないかという疑惑に尽きる。

バイデン新大統領も敬虔なカトリック信徒として知られている。これまでの 45 人⁹⁾ の大統領の中では、第 35 代のジョン・F・ケネディ (1917-1963・任期: 1961-1963) に続く二人目のカトリック信徒の大統領であり、それに黒人である第 44 代のバラク・オバマ (b.1961・任期: 2009-2017) を加えた三人目の非 WASP 大統領となる。

バイデン政権の誕生によって、「移民の教会」¹⁰⁾ であるカトリック教会に祝賀ムードが広がったのは事実である。先述の通りの民族的に多様な内閣においては、カトリック信徒という観点から非 WASP の閣僚も多い。ヒスパニックの 3 人、マルタからの移民の父を持つブティジェッジに加え、イタリア系の商務長官ジーナ・ライモンド (b.1971)、カトリックの孤児院出身の生母を持ちフランス系の養父母のもとで育ったとされる農務長官トム・ヴィルサック (b.1950)、バイデンと同じアイルランド系では、労働長官マーティ・ウォルシュ (b.1967)、退役軍人長官デニス・マクドノー (b.1969) がカトリック信徒である。中央情報局 (CIA) 長官ウィリアム・ジョゼフ・バーンズ (b.1956) については信教に言及する公的書類がないが、アイルランド系の苗字と出身校からカトリックであることが推察される。

2. 国民の結束と一致：WASP 社会におけるカトリック大統領の受容

就任式の式典においても、カトリック色が見られる場面があった。上下院合同就任式準備委員会は、1月20日の就任式前夜に「コロナ禍による犠牲者追悼式」を執り行った。式典進行の中心となったのは、バイデン新大統領とハリス新副大統領である。追悼式は祈祷から始まり、ワシントン市中心のリンカーン記念堂からワシントン記念塔へと伸びるリフレクション・プール沿いに並べられたランタンに追悼の点灯が行われ、終了した。この開式祈祷はカトリックのワシントン大司教ウィルトン・グレゴリー枢機卿（初のアフリカ系アメリカ人枢機卿）（b.1947）が担当し、ハリス新副大統領のスピーチの後、追悼の「アメイジング・グレース」を歌唱したのは、ミシガン州リヴォニアのカトリック病院である慈しみの聖母病院（St. Mary Mercy Livonia Hospital）の看護師であった。¹¹⁾一方、バイデン新大統領のスピーチの後、追悼歌としてゴスペル曲「ハレルヤ」（レナード・コーヘン作詞・作曲）を歌ったヨランダ・アダムス（b.1961）はペンテコステ・ホーリネス系の教会に繋がり、非カトリックとの調和がとられた。¹²⁾

1月20日の就任式に先立ち、新大統領と新副大統領はワシントンDCのデュボンサークルにあるカトリックの聖マシュー（マタイ）大司教座聖堂（St. Matthew's Cathedral）において、ミサに参加した。これはフランクリン・ローズヴェルト（1882-1945・任期：1933-1945）以来の歴代大統領のほとんどが就任式の朝、礼拝に出席してきた形に倣っている。プロテスタントの大統領はホワイトハウスにほど近い聖ジョン（ヨハネ）監督派教会を訪れるのが恒例であり、バイデンもこの習慣を踏襲しながら、自らの信仰であるカトリック教会のうちワシントンDCの中心である大司教座聖堂を選んだ形である。

就任式において開式祈祷を行ったのは、前ジョージタウン大学学長であり、イエズス会士のレオ・オドノヴァン（b.1934）神父であった。バイデン新大統領と旧知の仲であるオドノヴァン神父は、デラウェア州検事総長であった新大統領の長男ボー・バイデン（1969-2015）が2015年に脳腫瘍で帰天した際には葬儀ミサの司式を任された。バイデンは、オドノヴァンが責任者を務めるイエズス会の難民支援活動への寄付者として活動支援も行っている。¹³⁾また、バイデンが就任宣誓において左手を添えた聖書は、1893年からバイデン家で使われてきたカトリック版の聖書である。¹⁴⁾更に、1961年のケネディ大統領の就任式以来の伝統となった桂冠詩人による詩の朗読では、史上最年少となる22歳のアマンダ・ゴーマン（b.1998）の「我らが登る丘」¹⁵⁾が式典終了直後から様々な報道で賞賛を浴びたが、翌1月21日、ロサンジェルス大司教区の聖ブリギッド教会がホームページのトップで教会員であるゴーマンの業績を祝ったことで、彼女がカトリックであることも明らかになった。¹⁶⁾ゴーマンを推薦したのは、教育学博士号を有するバイデンの妻、ジル（b.1951）であったと伝えられている。¹⁷⁾

カトリック信徒であるゴーマンが、同じくカトリック信徒であるバイデンの就任式のためにこの詩を書いたことで、アメリカのカトリックもまた、WASPのプロテスタントの価値観を共有し、カトリックばかりでなく、全てのアメリカ人と共にアメリカの奉ずる民主主義の重要な担い手としての役割を分かち合っていることが示されたと言えよう。ゴーマンが描いた「我らが登る丘」とは、1630年、マサチューセッツ湾植民地総督となったピューリタンのジョン・ウィンスロップ（1588-1649）が、アメリカを目指して大西洋上にあったアーベラ号の中で書いたと言われている説教で描き出したアメリカ植民地の目指すべき姿である。ウィンスロップはこの説教の中で、「丘の上の町（City upon a Hill）」という言葉を使った。「丘の上の町」とはアメリカのことである。この言葉は「マタイによる福音書」5章14節、すなわち「あなたがたは世の光である。山の上の町は隠れることができない」（新共同訳）として、キリストの教える愛の精神において誰からも見上げられ、尊敬される模範であれとイエス自身が説いた、いわゆる「山上の説教」に由来する。つまり、アメリカ植民地はピューリタンの理想郷として、ヨーロッパに対して、全てのキリスト者に対して、範を示さねばならない、とウィンスロップは説いたのである。この説教は現代にまで引き継がれ、政治的な「アメリカ例外主義」の根幹となり、アメリカは他国とは異なり、例外的な民主主義国家の模範として、国際的にリーダーシップをとる立場にあることを当然視する考えに繋がっている。アメリカの政治家が「丘の上の町」を引用した例としては、1961年1月、就任式を2週間後に控えたケネディ大統領のマサチューセッツ州議会での演説¹⁸⁾、1980年11月のレーガン大統領の大統領選挙勝利演説¹⁹⁾、1989年1月のレーガン大統領の離任演説²⁰⁾、2006年2月、上院議員であったバラク・オバマのマサチューセッツ大学ボストン校での演説²¹⁾、2016年大統領選挙戦の中で2012年大統領選共和党候補であったミット・ロムニーのドナルド・トランプ候補批判のコメント²²⁾、また、2020年11月のマイク・ポンペイオ国務長官によるロナルド・レーガン研究所で行われた演説²³⁾などが挙げられる。とはいえ、一般のアメリカ人にとって「丘の上の町」は、「例外主義」というよりは、民主主義の理想の灯火を掲げる崇高な場所、というイメージで共有されている。アマンダ・ゴーマンの「我らが登る丘」は、前政権での国民の分断によって危機にあるアメリカの民主主義を修復し、再び尊敬に足る「丘の上の町」としてアメリカが再生するために、違いを脇に置き、共に目的を持って調和を築き、そこに既にある光を見るために、光となるために、勇気を持とうと訴えている。そのテーマは明確に、調和・一致である。²⁴⁾

就任式で強調されたのは、調和・一致・統合を表す「ユニティ（Unity）」という言葉であった。バイデン自身が行った新大統領の就任演説においても、コロナ禍の犠牲者への黙祷、また旧約聖書の「詩篇」からの引用があった。「(主は)ひととき、お怒りになって

も命を得させることを御旨としてくださる。泣きながら夜を過ごす人にも喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。」(新共同訳、「詩篇」30章6節)そして「私たちは共に手を携えて、この困難を乗り越える。共に手を携えて」と繰り返した。ここでも分断が強調された前政権からの転換が強く目指されている。バイデンの信仰ゆえに、カトリック色が随所に見られる就任式であったが、閉式の祝祷は、バイデンと30年近く親交を築いてきたデラウェア州ウィルミントンのベセル・アフリカン・メソジスト監督派教会の牧師、シルヴェスター・ビーマンが行った。自らの信仰が明らかであるバイデンに、新たな信仰の師が必要だった訳ではないが、バイデンはビーマンに対して、国民を励まし、心を高揚させる祝祷で閉式したいとの希望を伝え、ビーマンはそれを快諾した。²⁵⁾ 開式祈祷のオドノヴァンが元大学学長の肩書きを持つ老練な神学研究者であり、アイルランド系の白人カトリック司祭であったのとは対照的に、ビーマンは現場でエネルギーに司牧に励む黒人プロテスタント教会の牧師²⁶⁾である。ここにもバイデン政権が目指す多様性と一致を目指す選択が示されている。

今回の大統領選挙や就任式において、アメリカ史において長くマイノリティとされてきたカトリックの大統領が目指す統合・調和・一致を、大統領の信仰する宗教や宗教観を理由に否定する意見は著者の知る限り見られなかった。これは、60年前のケネディ大統領の就任時からの大きな変化である。ケネディは「アメリカに忠誠を誓う大統領になるのか。それともローマ教皇に忠誠を誓うのか」と問われ続けた大統領候補であった。テキサス州ヒューストン都市圏の教役者協会における演説で、「私はカトリックの大統領候補ではなく、たまたまカトリックである民主党の大統領候補である」と強調し、カトリック大統領候補であることを議論の種にして書き立ててきたメディアへの不満に反論すると共に、プロテスタントの教役者らの前で、「政教分離」が保証されたこの国においては、大統領も有権者も聖職者の言葉に政治的な選択を左右されることはない、それはカトリックもプロテスタントも同じはずである、と主張した。²⁷⁾ この時から60年を経て、カトリック信徒の大統領候補としては史上二人目²⁸⁾となるバイデンは、このような疑惑に晒されることはなかった。それは、ギャラップ社の行ってきた世論調査でも明らかである。「大統領候補がカトリック信徒であった場合、投票しない」と回答したのは、ケネディが大統領選に入る直前の1959年終盤では25パーセントだったものが、ケネディの大統領選挙を経て1961年の就任式後の調査では13パーセントに半減している。バイデンの選挙戦が始まってからの2020年1月の調査では4パーセントにまで減少した。興味深いことに、この時「他のことには十分な資質があっても、福音派(エヴァンジェリカル)のクリスチャンには投票しない」という回答は18パーセント(福音派の多くがトランプ前大統領を支持していたと言われる²⁹⁾)、「イスラム教徒や無神論者には投票しない」という回答は38

パーセントにも及んだことと比較すれば、もはや、カトリックであることが大統領候補となる障害とは言えない。³⁰⁾ かつて非 WASP であったカトリックとプロテスタントの間に、選挙のような政治・社会生活をめぐって、宗教を理由とする分断はほぼなくなったと言えるよう。

3. アメリカ・カトリックの分断：カトリック教会における信徒大統領の拒絶

一方、2020年の大統領選挙戦期間中に明らかとなったのは、アメリカのカトリック内部の分断の深刻さである。2019年10月末、選挙戦中に遊説に訪れた南部サウスカロライナ州フローレンスでの主日（日曜日）のミサ中、バイデンが聖体拝領を司祭に拒否されたとの報道があった。³¹⁾ 民主党の大統領候補として守るべき価値観にあたる中絶の権利と同性婚の権利の認容が、教会にとっての大罪に値すると当地の司祭に判断されたのである。今やカトリック信徒の政治家にとっての困難は、かつてメインストリームとしてマイノリティ排除を進めようとしたプロテスタントのアメリカ社会ではなく、彼らと同じカトリック教会の指導者たちやそれを支持する人々にある。

バイデンが聖体拝領を拒否されたのは、各州の選挙人を選出する11月3日の大統領選挙に先立つ主日であった10月27日午前9時半のミサの中でのことである。当該ミサの司式司祭であったロバート・モリーは、「聖体拝領は神、教会、共同体の個々人が一つとなる行いであるが、いかなる公人であれ、中絶を認容する者は教会の外に置かれるべきである」と主張する。さらに、現在に至るまでカトリック教会において信徒全てが従うべきとされるカノン法915条³²⁾において、「聖体を受けることができない者」には「頑なに大罪を貫き通す者」が含まれると付言した。モリー司祭の判断は、名誉教皇ベネディクト16世（b.1927・在位：2005-2013）がローマ教皇庁教理省長官ヨーゼフ・ラッツィンガー枢機卿として2004年に書いた「聖体拝領相応となる一般原則」のメモの内容にも則っている。ラッツィンガー枢機卿（当時）のメモは、「中絶や安楽死といった大罪について協力を公言する個人（カトリック信徒の政治家など）に対しては、教会における指導者（司祭）が面会し、教会の教えを説き、その罪の客観的状況が終了するまで司祭は聖体拝領の場に出ないと説明するか、さもなければその個人が聖体拝領を拒絶されることを警告する」としている。³³⁾

教義において保守で知られるベネディクト16世に賛同する高位聖職者（大司教・司教）はアメリカにも多い。とりわけバイブルベルトとしてプロテスタント福音派（エヴァンジェリカル）を育ててきた南部においては、カトリックの聖職者らも保守共和党に協調し、共に「プロライフ（命優先）」の声を上げる。カトリックにおける「プロライフ」運動は、1960年代においては民主党主導のニューディールのな人権観に基づき、誕生前の生命を

守る極めてリベラルな運動であったものが、1970年代後半に台頭した福音派（エヴァンジェリカル）が「プロライフ」運動に参入する中で、「倫理的秩序と家族の価値観の回復」というその後の政治的保守の本流となる運動に再編されていったという経緯がある。³⁴ 福音派（エヴァンジェリカル）人口の多い南部において、教義上「プロライフ」のカトリックによる政治的保守への合流が顕著であったことは言うまでもない。

バイデン自身も中絶問題については、胎児の生命を優先する「プロライフ」から、妊娠中の女性の選択権を優先する「プロチョイス」へと立場の変化を示している。19世紀から20世紀への世紀転換期以降、国内福祉政策や労働問題に重点を置く民主党は、労働組合やマイノリティ支持層を背景に、あらゆる意味における対マイノリティ政策を重視してきた。このため、中絶をめぐる「プロライフ」対「プロチョイス」の問題においては、女性の権利を保護する「プロチョイス」の立場を擁護する傾向にある。「プロライフ」を教会が声高に標榜する中で、敬虔な信徒であるバイデンは苦しい立場を余儀なくされた。バイデンは当初、妊娠が母体の生命を脅かす場合や、レイプや近親相姦による妊娠を除いて公的資金から中絶費用を出すことを違法と定めた「ハイド修正条項（1997年）」に賛成を示していた。一方、反対派は同修正条項が、低所得者向けの医療補償制度（メディケイド）による中絶補助費用支払いをも禁止することになり、低所得の女性に対する不当な差別に繋がるとして批判を繰り返してきた。民主党議員の多くがこの条項の撤廃を求めている。バイデンは2019年6月6日、「ハイド修正条項」を賛成していた立場を一転させ、公的資金による妊娠中絶支援に賛同する態度を表明したのである。民主党の大統領候補者は主要な候補だけでも20名を超え、2019年6月には有力な候補らとの熾烈な指名争いの中で、態度を転換せざるをえなくなったものと考えられている。³⁵ 民主党の指名争いの中で公的な中絶支援の表明は、多くのカトリック高位聖職者による批判の理由としては十分すぎるものであった。「プロライフ」に同調する同教会の信徒である有権者に対しても同様である。

このようなカトリック教会内の分断は、60年前のケネディの大統領選出の時代とはかなり様相が違っている。キリスト教においては初代教会から一貫して妊娠中絶を殺人と見なし、これに反対してきたが、現在「プロライフ」と呼ばれる人々の運動のアメリカにおける直接的契機は、合衆国連邦最高裁判所による「ロー対ウェイド判決（1973年）」である。妊娠中の未婚女性の中絶手術を行った医師が逮捕され、当該女性と医師が地方検事を訴えて起こした裁判であり、母体の保護を理由とする場合を除き中絶を違法としたテキサス州法の違憲性を審理するものであった。最高裁判決は7対2でテキサス州の中絶法を違憲とした。この判決の日以来、毎年、この判決日前後に「胎児の人権」³⁶を守るための「いのちの行進（March for Life）」が行われるようになり、人工妊娠中絶の実施と合憲の両

方に対する平和的抗議活動が続けられている。19世紀前半に女性の健康への配慮から妊娠中絶の禁止を法律化する州が現れ始めるが、19世紀後半までに女性の生命への危険を例外として、ほとんどの州が妊娠中絶を禁止するようになった。これに緩和の動きが出始めるのが1960年代である。1960年代は公民権運動の進展や非WASPの大統領誕生の中で、社会のリベラル化が急速に進み、マイノリティの権利が注目された時代であった。ケネディの選挙戦においては、プロライフ対プロチョイスは大きな政策議論の対象とはならなかったが、19世紀末以来、アイルランド移民たちを大きな支持層として取り込んできた民主党の政治家として、ジェンダーマイノリティであった女性の選択権とプライバシーを守ることは党是に従うことであり、1970年代後半に存命していたならば、カトリシズムとプロチョイスの葛藤にはケネディ自身も晒されうる立場にあった。1963年にケネディが暗殺された後、妻ジャクリーンや成長した長女キャロラインは、プロチョイス支持の立場を明確に示してきた。³⁷⁾ このように、社会のリベラル化が進むのがケネディの大統領就任後であったことから、ケネディの選挙戦において、アメリカのカトリック教会がこの問題において分断を示すことはなかったが、2020年のバイデンの選挙戦においては、カトリックの民主党候補にとって分断の間の綱渡りを余儀なくされることは避けようがなかった。プロチョイスを支持するロー対ウェイド判決に至るリベラル化の波自体が1960年代のケネディ大統領の時代に生まれたことを考えれば、この分断自体が、様々な軸を持つ多様性（民族・宗教・社会的階層・性差など）を支持することはそれぞれが必ずしも政治的には一致しない、という分断の不可避的な性格を物語っている。

カトリック教会と非カトリック教会の関係で見れば、1960年代は融和の始まりの時代でもあった。老齢で「繋ぎの教皇」と目されていた教皇聖ヨハネ23世（1881-1964・在位：1958-1963）が公会議招集の考えを表明したのが1959年1月である。第二バチカン公会議を開催するという教皇の考えは、熟慮の末に生まれたものではなく、「予期しないところにふと訪れた春の木々の芽生えのよう」³⁸⁾なものと教皇自身が述懐しており、準備開始以前に明確な企図が明らかにされていない。ヨハネ23世が公会議開催を思い立つのと同時期に当たる1958年秋頃からケネディの1960年大統領選出馬が報道で取り沙汰され始めていた。³⁹⁾ 公会議の最大のテーマは「カトリック教会の現代化」であり、5大陸からの代表によって初めて話し合われた本公会議は、1962年10月に開催され、その後のカトリック教会の刷新の足がかりとなった。癌のために会期中に帰天したヨハネ23世を引き継いだ新教皇聖パウロ6世（1897-1978：在位1963-1978）は、公会議の議案を整理し、「教会論の確立と司教団の役割の検討」「教会の刷新・現代化」「エキュメニズム（教派間の対話）の推進」「カトリック教会と現代世界の対話」に焦点を絞って議論を続け、教会内の保守派とリベラル派の激しい議論による紆余曲折を経て、1965年12月8日無原罪の聖

母の記念日をもって閉会する。1054年以来のカトリック教会と正教会の相互破門が相互解除され、カトリック教会によるキリスト教他教派との対話、また現代社会の諸問題の中に生きる現代の人々との対話がパウロ6世によって宣言された。⁴⁰⁾

ケネディの大統領選運動期間中に教皇ヨハネ23世による開催の準備が伝えられ、ケネディの任期(1961～1963)中にパウロ6世によって牽引された第二バチカン公会議に対して、その50周年となる2012年の諸論文においては、当時の混乱に対してネガティブな見解を示すアメリカ・プロテスタント側の研究者やジャーナリストが見られる⁴¹⁾が、「カトリック大統領」誕生を受容するか否かという1960年の大統領選挙の結果についてそれらの論文で見る限り、アメリカのプロテスタント社会一般には好意的に受け止められた様子を推論することができる。ジョンズ・ホプキンス大学教授のケン・マズギは、「ケネディは第二バチカン公会議に救われた」と明言する。⁴²⁾ 公会議開催によって、非カトリックによるカトリック認容が進んだということである。実際に、ケネディは、アメリカ南東部から中西部に広がるいわゆる「バイブルベルト」諸州(プロテスタントの福音派・南部バプテスト連盟・キリスト教根本主義などが熱心に信仰されている地域)において、選挙戦で勝利しているのである。(ノースカロライナ・サウスカロライナ・ジョージア・アラバマ・アーカンソー・ミズーリ・ルイジアナ・テキサス州で民主党が選挙人を獲得している。)⁴³⁾ カトリックの有権者による投票で見ると、1960年の選挙では民主党(ケネディ候補)に80パーセント、共和党(リチャード・ニクソン候補)に20パーセントと、民主党に史上最も高い割合で投票が行われ、カトリック信徒はほぼ分断なく、大多数がケネディに投票したと言えよう。⁴⁴⁾ ケネディは1962年10月5日の第二バチカン公会議開会にあたり、ヨハネ23世に宛ててメッセージを送った。その中で、この公会議開会準備においては、非カトリック信徒を含む多くのアメリカ人が携わったことが述べられている。そしてこの手紙の結びとして述べられている「現代社会の諸問題への明確な文言による解決」とは、ケネディが自政権で目指したニューフロンティア構想とも一致する。⁴⁵⁾ アメリカ大統領選挙の投票傾向から見れば、この融和は一時的なものと言わざるを得ない。それでも、アメリカの多様性認容の流れの中で生まれたケネディ政権は、現代社会や他教派との対話に向けて大きく舵を切ったカトリック教会と共に、社会変革を牽引していくこととなったのである。

しかし、アメリカのカトリック信徒が一致した投票を示した選挙としては、これがピークである。1968年の大統領選挙以降、カトリック有権者の党派別投票傾向のデータでは、民主党の得票率は42パーセントから55パーセントの間を行き来している。ジョン・F・ケネディが1963年11月に暗殺され、副大統領だったリンドン・ジョンソン(1908-1973・任期：1963-1969)が5年と2ヶ月の大統領任期を務めた後任を決める1968年の大統

領選挙の最中にケネディ政権で司法長官だった弟ロバート・ケネディ（1925-1968）も暗殺された。兄の後を継ぐカトリック大統領候補は消え、バチカンでは1967年のロー対ウェイド判決を受けて教皇パウロ6世が1968年、回勅『フマーネ・ヴィテ（*Humanae Vitae*: 人間の生命）』⁴⁶⁾を發布し、カトリック教会として一切の人工的産児制限を禁じた。カトリックとしてのプロライフ運動は、この回勅によって教会の教えに従うという絶対的な正当性を得る。カトリック信徒である民主党政治家への支持は、ここから不可避的に分断の道を辿ることとなった。

4. コロナ禍で複雑化するアメリカ政治とカトリック

ドナルド・トランプ前政権との違いを際立たせ、とりわけ政権末期に民主主義の危機の様相を呈した前政権時代からの再生を国民と世界に対して意識させるような多様性を前面に打ち出した閣僚構成を示したジョー・バイデン新政権は、合衆国史上二人目のカトリックの大統領としてプロテスタント国家であるアメリカ社会からの認容を受けるという点では大きな問題を示さなかったが、一方で、アメリカのカトリックの分断を顕にする船出をすることとなった。このカトリックの分断と政治の関係は、コロナ禍において更に複雑な様相を呈している。

バイデン政権には前政権からの好ましからざる大きな置き土産がある。2020年10月26日、僅差で共和党が勝る上院において承認を受けた最高裁陪席判事エイミー・コニー・バレット（b.1972）である。同年9月18日、リベラル派判事の代表的存在であり、1993年のビル・クリントン政権下で指名・承認を受けたユダヤ系2世のルース・ベイダー・ギンスバーグ判事（1933-2020）の逝去により、トランプ前大統領が指名したのがバレットであった。南部ニューオーリンズ出身であり、父方がアイルランド系、母方がフランス系のカトリックという家庭で育ち、カトリックのノートルダム大学（インディアナ州）のロースクールで法学博士号を取得したバレットは、レーガン政権下で最高裁判事に任命されたアントニン・スカリア（1936-2016）の調査官として働き、スカリアのオリジナリズム（原意主義）を受け継いでいる。オリジナリズムとは、時代によって憲法の意味が変化することはないとする法哲学であり、保守的な司法判断の根拠とされてきた。バレットに対する前政権末期の駆け込み的な任命には批判も多い。オバマ政権末期の2016年にスカリアが帰天し、オバマ大統領がメリック・ガーランド判事（現司法長官）を後任に指名した時には、共和党優勢の上院によって任命拒否され、共和党の上院院内総務ミッチ・マコーネル（b.1942）は「大統領選挙の年の後任人事指名は控えるべきである」と主張していた。（バレットの承認は大統領選挙の10日前であり、バイデンは大統領候補の立場でかつてのマコーネル同様の批判を表明している。）その結果、後任となったのが2017年にトラ

ンプ大統領が指名したニール・ゴースッチ (b.1967) であるが、上院での承認が難航したためにマコーネルが上院規則を変更する事態となっていた。バレット、スカリア、ゴースッチの3人は、いずれもオリジナリズムの立場をとり、極めて保守的な政治観を共有するカトリック信徒であり、人工中絶に対して反対の立場をとるプロライフ判事である。そしてトランプ政権がゴースッチ、ブレット・カバノー (b.1965)、バレットの3人の最高裁判事を指名した結果、2021年1月現在の9人の判事の構成は保守派6名、リベラル派3名となっている。⁴⁷⁾

バレットが最高裁陪席判事として参加した最初の裁判は、コロナ禍の中で教会でのミサや礼拝の厳しい参加人数制限を行ったニューヨーク州知事アンドリュー・クオモ (b.1957) に対してカトリック・ブルックリン司教区が提訴したものである。米国内でも罹患者数と死亡者数の際立って多いニューヨーク州において、感謝祭前の礼拝参加者数規制（オレンジゾーンにあたるニューヨーク市ブルックリン区においては一律25人まで）を行ったクオモ知事（クオモ自身もイタリア系のカトリック信徒・民主党員である）に対して、カトリック・ブルックリン司教区は正統派ユダヤ教グループであるアグダス・イスラエル・オブ・アメリカなどと共に、その規制の差し止めを求めた。当該判決は9人の判事のうち規制差し止め賛成が5人、反対が4人と割れた。判決の主要な論点は憲法修正1条にて保証されている「信仰の自由」であり、対面礼拝が戻りつつあった2020年秋のコロナ禍による規制に対する緊急性が問われる結果となった。例えばブルックリン司教区の中心である聖ジェームズ（ヤコブ）司教座聖堂の収容人数は700名を超えるが、規制は一律に参加者数を25名までとしていた。5対4の最高裁判決は、バレットの1票が決定打であったことを示している。リベラルな視点の記事が目立つ『ニューヨーク・タイムズ』がこの判決に賛辞を送った。一方で、オバマ大統領に指名を受けたりベラル派の判事であり、ヒスパニック、カトリックであるソニア・ソトマイヨール (b.1954) 判事は反対に回っている。最高裁におけるカトリック判事の判断がより複雑な様相を示すバイデン就任直前の判決であった。⁴⁸⁾ コロナ禍における感染症対策・公共益のための規制と人権問題をめぐり、カトリック信徒が関わる政治的判断がより複雑化しているのである。

おわりに：大統領の信仰と2021年のカトリック教会

2021年1月20日のジョー・バイデンの大統領就任をアメリカのカトリック教会は歓迎したのか。一つの答えは、この就任式の日に発表されたアメリカ・カトリック司教中央協議会会長ホゼ・ゴメス (b.1951：ロサンジェルス大司教) の声明である。バイデンの篤い信仰心を認め、国家の再統合を謳う政策方針に賛意を送りながらも、「中絶」「産児制限」「結婚」「性」の問題に深い憂慮を示し、新政権が教会と共に、教会の意思を尊重して

選択を行うことを強く求める内容となっており、新政権の船出に釘を刺す形であった。⁴⁹⁾

一方、バチカンはどうのように反応したか。2020年11月のバイデンによる選挙勝利宣言後、教皇フランシスコ（b.1936：在位2013-）は祝意と祝福を送り、平和と和解、世界と共有する繋がりへの創出に期待を寄せた。⁵⁰⁾ アメリカにおいては選挙戦の最終盤にあたる同年10月3日、フランシスコは3番目の回勅『フラテリ・トゥッティ（*Fratelli Tutti*：全ての兄弟（姉妹））』を発し、兄弟愛と社会的友愛について説いた。自らの教皇名とした聖フランシスコの墓所であるイタリア・アッシジのフランチェスコ聖堂において発表した回勅は、8章を通してより正しく兄弟的で互いの尊厳の上に立つ世界構築のために、個々人の繋がり、社会、政治、公共制度などにおいて、人が選ぶべき態度を示唆する。⁵¹⁾ 現代社会問題に直接的に関わる内容であり、とりわけ、移民や辺境の人々、先住民に対する問題や多様な格差における多様な搾取の問題など、世界的に共通しながらも、アメリカの政治や社会に解決のリーダーシップを期待すると考えられる問題がほとんどを占めており、その方向性はバイデン新政権の企図するものに重なるところも多い。

就任式以降、バイデン新大統領は既に多くの大統領令に署名を行い、前政権の命令を覆したものも複数含まれている。国際協調路線の復帰においては、パリ協定への復帰、WHO脱退の撤回、また移民問題においては、差別的な入国制限の禁止⁵²⁾、メキシコからの不法移民を防ぐための国境の壁の建設の停止⁵³⁾などが既に署名されている。親と引き離された移民の子どもたちの問題解決のためのタスクフォース創設も公約の一つである。また、LGBTQの軍へのサービスを禁じた前政権の大統領令を撤廃する大統領令⁵⁴⁾を発している。先立つ最初のいくつかの大統領令で定めた通り、政権が多様性を推奨し、差別とは断固として立ち向かう姿勢が明確なものとなった。リベラルで知られる教皇フランシスコもまた、多様性を受容する姿勢を重視しており、教会においては長年権利保護の対象から除外されていたLGBTQの人々について、（教会の秘跡としての）結婚についての原則を変えることはないとしながらも、同性カップルのシビル・ユニオン（Civil Union：法的に承認するパートナーシップ）について、「ホモセクシャルの人々も家族となる権利がある」として支持している。⁵⁵⁾ 教会の原則を傷つけない配慮のもとで、多様性を認める姿勢において、両者には共通しているものがある。また、前大統領とは確執を見せた教皇も、バイデン新大統領に対してはまだ少ないメッセージのやりとりの中から、歓迎と共感の姿勢を窺わせる。

アメリカのみならず、世界中の分断が表出する中でのパンデミックの時代にあって、教皇フランシスコは2020年12月8日の無原罪の聖母の祝日に、カトリック教会がその日から1年間を教会の守護聖人である「聖ヨセフの年」として祝うことを定めた。⁵⁶⁾ 日本のカトリック中央協議会は以下のように説明する。

「教皇は同日（12月8日）、使徒的書簡『パトリス・コルデ』（父親の心で）を発表し、イエスの養父としての聖ヨセフの優しさやあふれる愛、神からの召命への従順さ、父親としてあらゆることを受容し、創造性をもって行動した勇氣、質素な労働者としての姿、目立つことがなかった生き方に触れています。聖ヨセフは『執り成しの人、苦難の時に支え、導いてくれる人』だと教皇は記しています。（中略）教皇フランシスコは使徒的書簡で、新型コロナウイルスのパンデミックが続く中で、聖ヨセフが示してくれているのは、日々の困難を耐え忍び、希望を示しているが、決して目立つことのない『普通の人々』の大切さだと強調しています。」⁵⁷⁾

新大統領であるジョー・バイデンは、度重なる家族の喪失を通じて個人的な苦難を乗り越えてきた体験で知られる。副大統領のハリスは勝利演説の中でバイデンを「癒す人 (healer)」「執りなす人 (uniter)」と表現した。⁵⁸⁾ 決して目立つ大統領ではなく、炭鉱の町スクラントン出身で、母を喪った息子たちのためにデラウェアからアムトラックでワシントンの連邦議事堂まで電車通勤をし、上院議員の時代を通して「普通の人々」との対話を重ねてきた人物である。「聖ヨセフの年」を祝うことを定めた使徒的書簡『パトリス・コルデ』に見られる通り、フランシスコ教皇がコロナ禍のこの時代に求める人物像に合致するリーダーとして、バイデンを捉えていても不思議はない。米国内のカトリックの分断は相変わらずであり、中絶問題についてカトリック信徒である民主党大統領の立場が未だ難しいものであることに変わりはないが、バイデンに対して協働を期待する教会最大の影響力を持つリーダーがバチカンにいるようである。偶然であろうか。バイデンの守護聖人を示すファーストネームもまたジョゼフ（ヨセフ）なのである。

註

- 1) 在日米国大使館「法律：アメリカ合衆国憲法に追加され、またはこれを修正する条項：修正第20条1項」『アメリカン・センター』<https://americancenterjapan.com/aboutusa/laws/2569/> 2021年1月21日取得。
- 2) Andrew Solender, "Joe Biden Wins Presidency after Recapturing Rust Belt States" *Forbes*, November 7, 2020. <https://www.forbes.com/sites/andrewsolender/2020/11/07/joe-biden-wins-presidency-after-recapturing-rust-belt-states/?sh=ef2f9e72030a> Retrieved on November 9, 2020.
- 3) Camille Caldera, "Fact Check: These 5 Election Statistics Do Not Discredit Joe Biden's Victory" *USA Today*, December 31, 2020. <https://www.usatoday.com/story/news/factcheck/2020/12/31/fact-check-5-election-statistics-do-not-discredit-joe-bidens-victory/4086497001/> Retrieved on January 23, 2021.

- 4) "Vice President-Elect, Kamala Harris' Victory Speech: Full Text" *The Times of India*, November 8, 2020. <https://timesofindia.indiatimes.com/world/us/us-presidential-elections/vice-president-elect-kamala-harris-victory-speech-full-text/articleshow/79108047.cms> Retrieved on November 8, 2020.
- 5) Kamala Harris, "Full Text: Kamala Harris' Acceptance Speech: We Have a Chance to Change the Course of History" *Scroll. In*, August 20, 2020. <https://scroll.in/global/970869/full-text-kamala-harris-acceptance-speech-at-the-democratic-national-convention> Retrieved on August 21, 2020.
- 6) 2021年1月20日のバイデン政権発足当初の閣僚メンバーは以下のサイトで確認できる。White House, "The Cabinet" <https://www.whitehouse.gov/administration/cabinet/> 2021年1月21日取得。
- 7) Martin Pengelly, "Kamala Harris Reportedly Chose Apt Secret Service Code Name: Pioneer" *The Guardian*, August 18, 2020. <https://www.theguardian.com/us-news/2020/aug/18/kamala-harris-secret-service-code-name> Retrieved on November 5, 2020.
- 8) 聖公会と同義だが、日本のアメリカ史においては慣習的に監督派教会と訳出してきた。英国国教会と深い繋がりがある。
- 9) バイデン大統領は第46代大統領であるが、19世紀後半にグローバー・クリーブランド大統領が間にベンジャミン・ハリス大統領の任期を挟んで2期を務め、第22代と第24代となっているため、45人目の大統領となる。
- 10) アメリカで「移民の世紀」と言われる19世紀に流入した大量移民たちの出身国の多くがカトリック国であり、極めて貧困状態にある労働者階級が多かったため、アメリカのカトリック教会は精神的・福祉的に様々な対応を迫られた。現在アメリカ市民となっているカトリック信徒の多くがこのときの移民の子孫と20世紀の中南米諸国からの移民の家族である。山崎由紀「移民の教会としてのカトリックー非WASP社会の形成と社会的上昇」杉田米行編『アメリカ観の変遷 上巻』大学教育出版、2014年。
- 11) Melissa Nann Burke, "Michigan Nurse to Sing at COVID Memorial ahead of Biden Inauguration" *The Detroit News*, January 18, 2021. https://docs.google.com/document/d/1s5zbHYksnm5SbgteiZ_uXlNm1DU04BcbVzQDkMYqQ44/edit Retrieved on January 20, 2021.
- 12) 追悼式の様子は以下のYouTubeチャンネルで視聴できる。
Biden-Harris Inauguration Committee (under the name of "Joe Biden"), "Tune In: Nationwide COVID-19 Memorial," streamed on January 19, 2021. <https://www.youtube.com/watch?v=QMhCpZHDTxo> Retrieved on January 20, 2021.
- 13) Kevin Christopher Robles, "Who is Father Leo O'Donovan, the Jesuit Priest Delivering the Invocation at Biden's Inauguration?" *America: the Jesuit Review*, January 19, 2021. <https://www.americamagazine.org/faith/2021/01/19/who-father-leo-odonovan-jesuit-biden-inauguration-239762> Retrieved on January 22, 2021.
Christopher White, "Jesuit Fr. Leo O'Donovan to Deliver Invocation at Biden Inauguration" *National Catholic Reporter*, January 6, 2021. <https://www.ncronline.org/news/people/jesuit-fr-leo-odonovan-deliver-invocation-biden-inauguration?fbclid=IwAR1XFnavI8P31wvSSzG76PAeq6NNhOawYSNWYbYC3z6Skg3HNvVJfnMf4c> Retrieved on January 7, 2021.
- 14) Devan Cole, "Biden was Sworn In on a Storied 19-Century Family Bible" *CNN*, January 20, 2021. <https://edition.cnn.com/2021/01/20/politics/biden-inauguration-family-bible/index.html> Retrieved on January 22, 2021.
- 15) "READ: Youth Poet Laureate Amanda Gorman's Inaugural Poem" *CNN*, January 21, 2021.

- <https://edition.cnn.com/2021/01/20/politics/amanda-gorman-inaugural-poem-transcript/index.html> Retrieved on January 22, 2021.
- 16) *St. Brigid Church*. <https://stbrigidchurchla.org> Retrieved on January 22, 2021.
 - 17) Alexander Alter, "Amanda Gorman Captures the Moment, in Verse" *New York Times*, January 19, 2021. <https://www.nytimes.com/2021/01/19/books/amanda-gorman-inauguration-hill-we-climb.html> Retrieved on January 22, 2021.
 - 18) "The President-Elect: City upon a Hill" *TIME*, January 20, 1961. <http://content.time.com/time/subscriber/article/0,33009,871951,00.html> Retrieved on January 22, 2021.
 - 19) "Election Eve Address 'A Vision for America'" *The American Presidency Project*. <https://www.presidency.ucsb.edu/node/285591> Retrieved on January 22, 2021.
 - 20) "Farewell Address to the Nation," January 11, 1989. *Ronald Reagan Presidential Library and Museum*. <https://www.reaganlibrary.gov/archives/speech/farewell-address-nation> Retrieved on January 22, 2021.
 - 21) "University of Massachusetts at Boston Commencement Address," June 2, 2006. <http://obamaspeeches.com/074-University-of-Massachusetts-at-Boston-Commencement-Address-Obama-Speech.htm> Retrieved on January 22, 2021.
 - 22) Ed O'Keefe, "Mitt Romney Slams 'Phony' Trump: He's Playing 'the American Public for Suckers'" *Washington Post*, March 4, 2016. <https://www.washingtonpost.com/news/post-politics/wp/2016/03/03/mitt-romney-trump-is-a-phony-a-fraud-who-is-playing-the-american-public-for-suckers/> Retrieved on January 22, 2021.
 - 23) Mike Pompeo, "The Promise of America" at Ronald Reagan Institute Center for Freedom and Democracy, November 10, 2020 (Press Release). *U.S. Department of State*.
 - 24) "READ: Youth Poet Laureate Amanda Gorman's Inaugural Poem"
 - 25) Curtis Bunn, "Meet the Rev. Sylvester Beaman, the Delaware Pastor Delivering Inauguration Benediction" *NBC News*, January 18, 2021. <https://www.nbcnews.com/news/nbcblk/meet-rev-sylvester-beaman-delaware-pastor-delivering-inauguration-benediction-n1254553> Retrieved on January 23, 2021.
 - 26) 前日の追悼式、就任式の閉式にあたりプロテスタント教会に繋がる人材が配されたが、いずれもアメリカの主流派教会ではないことにも注目する必要がある。バイデン政権が目指す多様性を紐解く鍵の一つとなろう。
 - 27) "Transcript: JFK's Speech on His Religion, September 12, 1960" *NPR*, December 5, 2007. https://www.npr.org/templates/story/story.php?storyId=16920600&utm_source=link_news-v9&utm_campaign=item_247676&utm_medium=copy Retrieved on January 22, 2021.
 - 28) カトリックの大統領候補はこれまでに4人存在する。ケネディ、バイデンに加え、1928年の大統領選挙に臨んだニューヨーク州知事アル・スミス (Alfred Emanuel Smith, Jr.: 1873-1944) と2004年の大統領選挙に臨んだジョン・ケリー (John Forbes Kerry: b. 1943) である。ジョン・ケリーはオバマ政権の国務長官であり、バイデン政権では新設される気候担当大統領特使に任命されている。
 - 29) 2020年7月にピュー・リサーチセンターが発行した記事において、「福音派 (エヴァンジェリカル) の信仰を持ち、次の選挙でトランプに投票するとした人は8割にのぼった」とのデータが紹介されている。Michael Lipka and Gregory A. Smith, "White Evangelical Approval of Trump Slips, but Eight-to-Ten Say They would Vote for Him" *Pew Research Center*, July 1, 2020. <https://www.pewresearch.org/fact-tank/2020/07/01/white-evangelical-approval-of-trump-slips-but-eight-in-ten-say-they-would-vote-for-him/> Retrieved on December 2, 2020.

- 30) Frank Newport, "Joe Biden and the Catholic Factor" *Gallup*, July 24, 2020. <https://news.gallup.com/opinion/polling-matters/247676/joe-biden-catholic-factor.aspx> Retrieved on January 22, 2021.
- 31) Eric Bradner, "Joe Biden was Denied Communion at Catholic Church in South Carolina" *CNN*, October 29, 2019. <https://edition.cnn.com/2019/10/29/politics/joe-biden-denied-communion-south-carolina-catholic-church/index.html> Retrieved on January 22, 2021; Deidra C. Mays, "Joe Biden Denied Communion at Mass during Campaign Stop in South Carolina" *America: The Jesuit Review*, October 29, 2019. <https://www.americamagazine.org/politics-society/2019/10/29/joe-biden-denied-communion-mass-during-campaign-stop-south-carolina> Retrieved on January 22, 2021; Julia Terruso, "Philadelphia's Retired Archbishop Says Biden Should be Denied Communion over His Abortion Stance" *Philadelphia Inquirer*, December 7, 2020. <https://www.inquirer.com/news/philadelphia/joe-biden-charles-chaput-communion-catholic-20201207.html> Retrieved on January 22, 2021.
- 32) "Code of Canon Law" *The Holy See*. http://www.vatican.va/archive/cod-iuris-canonici/cic_index_en.html Retrieved on January 24, 2021.
- 33) Mays, "Joe Biden Denied Communion at Mass during Campaign Stop in South Carolina."
- 34) Daniel K. Williams, "The Partisan Trajectory of the American Pro-Life Movement: How a Liberal Catholic Campaign Became a Conservative Evangelical Cause" *Religions*, Vol.6, No.2, 2015, pp. 451-475. <https://doi.org/10.3390/rel6020451> Retrieved on January 24, 2021.
- 35) Mays, "Joe Biden Denied Communion at Mass during Campaign Stop in South Carolina."
- 36) 「胎児の人権宣言」が初めて宣言されたのは、1991年4月25日から27日に東京にあるカトリック系大学の上智大学で開催された国際生命尊重会議の中でのことである。
- 37) Anne Hendershott, "How Support for Abortion Became Kennedy Dogma" *The Wall Street Journal*, January 2, 2009. <https://www.wsj.com/articles/SB123086375678148323> Downloaded on November 29, 2020.
- 38) 南山大学監修『歴史に輝く教会』（公会議解説叢書6）中央出版社、1969年、283頁。
- 39) ケネディの1960年大統領選出馬への支持表明で早いものには、1958年10月24日のフランク・シナトラのものなどが挙げられる。Diana Pearl, "New Book Details John F. Kennedy's Short-Lived, Intense Friendship with Frank Sinatra" *People*, November 28, 2016. <https://people.com/politics/john-f-kennedy-frank-sinatra-friendship-new-book/> Retrieved on November 29, 2020.
- 40) 『歴史に輝く教会』、445～446頁。
- 41) Martin E. Marty, "A Great Awakening: A Protestant Historian Recalls Vatican II" *America: The Jesuit Review*, June 18, 2012.
- 42) Ken Masugi, "Vatican II Saved JFK" *Real Clear Religion*, December 13, 2013. https://www.realclearreligion.org/articles/2013/12/13/vatican_ii_saved_jfk.html Retrieved on December 1, 2020.
- 43) The American Presidency Project, "1960" *University of California at Santa Barbara*. <https://www.presidency.ucsb.edu/statistics/elections/1960> Retrieved on December 1, 2020.
- 44) "Two-Party Catholic Presidential Vote of Catholics" *The Center for Applied Research for the Apostolates, Georgetown University*. <https://cara.georgetown.edu/CARAServices/FRStats/PresidentialVoteOnly.pdf> Retrieved on December 1, 2020.
- 45) John F. Kennedy, "Message to Pope John XXIII on the Occasion of the Opening of the

- Second Vatican Council" dated on September 27, 1962, released on October 5, 1962. *The American Presidency Project at the University of California, Santa Barbara*. <https://www.presidency.ucsb.edu/documents/message-pope-john-xxiii-the-occasion-the-opening-the-second-vatican-council> Retrieved on December 1, 2020.
- 46) Pope Paul VI, "Encyclical Letter of *Humanitae Vitae*: To His Venerable Brothers, the Patriarchs, Archbishops, Bishops, and Other Local Ordinaries in Peace and Communion with the Apostolic See, to the Clergy and Faithful of the Whole Catholic World, and to All Men of Good Will, on the Regulation of Birth." *The Holy See*. http://www.vatican.va/content/paul-vi/en/encyclicals/documents/hf_p-vi_enc_25071968_humanae-vitae.html Retrieved on December 1, 2020.
- 47) Jacob Jarvis, "Joe Biden Says Amy Coney Barrett's Confirmation to Supreme Court Threatens Affordable Health Care" *Newsweek*, October 27, 2020. <https://www.newsweek.com/joe-biden-amy-coney-barrett-affordable-care-act-1542308> Retrieved on January 10, 2020; William McGurn, "Amy Coney Barrett and Joe Biden: Two Catholics, One Double Standard" *The Wall Street Journal*, September 28, 2020. <https://www.wsj.com/articles/amy-coney-barrett-and-joe-biden-two-catholics-one-double-standard-11601333535> Retrieved on January 10, 2020.
- 48) Adam Liptak, "Splitting 5 to 4, Supreme Court Backs Religious Challenge to Cuomo's Virus Shutdown Order" *New York Times*, November 26, 2020. <https://www.nytimes.com/2020/11/26/us/supreme-court-coronavirus-religion-new-york.html> Retrieved on January 10, 2021.
- 49) José H. Gomez, "USCCB President's Statement on the Inauguration of Joseph R. Biden, Jr.'s as the 46th President of the United States of America" released on January 20, 2021. *The United States Conference of Catholic Bishops*. <https://www.usccb.org/news/2021/usccb-presidents-statement-inauguration-joseph-r-biden-jr-46th-president-united-states> Retrieved on January 22, 2021.
- 50) Simon Lewis, "Pope Francis Congratulates Biden, Stepping into Political Fray" *Reuters*, November 13, 2020. <https://www.reuters.com/article/us-usa-biden-pope-idUSKBN27S2TQ> Retrieved on December 2, 2020.
- 51) Pope Francis, "Encyclical Letter, *Fratelli Tutti* on Fraternity and Social Friendship" *The Holy See*, October 3, 2020. http://www.vatican.va/content/francesco/en/encyclicals/documents/papa-francesco_20201003_enciclica-fratelli-tutti.html Retrieved on October 5, 2020; 日本語でも解説を読むことができる。イザベラ・ピーロ「『Fratelli Tutti』教皇フランシスコの社会的回勅発表」『Vatican News』2020年10月4日。 <https://www.vaticannews.va/ja/pope/news/2020-10/papa-francesco-enciclica-sociale-fratelli-tutti.html> Retrieved on December 2, 2020.
- 52) The President of the United States, "Proclamation on Ending Discriminatory Bans on the Entry to the United States" White House, January 20, 2021. <https://www.whitehouse.gov/briefing-room/presidential-actions/2021/01/20/proclamation-ending-discriminatory-bans-on-entry-to-the-united-states/> Retrieved on January 22, 2021.
- 53) The President of the United States, "Proclamation on the Termination Of Emergency With Respect To The Southern Border Of The United States And Redirection Of Funds Diverted To Border Wall Construction" *White House*, January 20, 2021. <https://www.whitehouse.gov/briefing-room/presidential-actions/2021/01/20/proclamation-termination-of-emergency-with-respect-to-southern-border-of-united-states-and-redirection-of-funds->

- diverted-to-border-wall-construction/ Retrieved on January 22, 2021.
- 54) The President of the United States, "Executive Order on Enabling All Qualified Americans to Serve Their Country in Uniform" *White House*, January 25, 2021. <https://www.whitehouse.gov/briefing-room/presidential-actions/2021/01/25/executive-order-on-enabling-all-qualified-americans-to-serve-their-country-in-uniform/>
- 55) "Pope Francis Indicates Same-Sex Civil Unions" *BBC*, October 21, 2020. <https://www.bbc.com/news/world-europe-54627625> Retrieved on October 25, 2021.
- 56) Pope Francis, "Apostolic Letter, *Patris Corde* on the 150th Anniversary of Saint Joseph as Patron of the Universal Church" http://www.vatican.va/content/francesco/en/apost_letters/documents/papa-francesco-lettera-ap_20201208_patris-corde.html Retrieved on October 10, 2020.
- 57) 「教皇フランシスコ、ヨセフ年を宣言」『カトリック中央協議会』2020年10月8日。 <https://www.cbcj.catholic.jp/2020/12/08/21746/> 2020年10月9日閲覧。
- 58) "Vice President-Elect, Kamala Harris' Victory Speech: Full Text"